

主日礼拝

2026年5月17日

「**人生の迷子になったら**」

詩篇25篇（新共同訳）

1 導入部

みなさん、おはようございます。一言、お祈りをします。

2月以来の奉仕になります。最初に自己紹介をしたいと思います。塚本良樹と申します。私は、2018年から2021年3月まで、この教会で青年担当牧師、ユースパスターとして奉仕していました。この教会で結婚式を挙げさせていただきまして、本当にお世話になりました。今年も、だいたい三か月に一回くらいのペースで来させていただき、礼拝と午後のユースでご奉仕させていただきます。

2 本論部

一. 不完全な現状を表す詩の手法

詩篇25篇はアクロスティックという「手法」で書かれています。これは最初の文字をつなげるとヘブライ語のアルファベット順になっているということです。詩篇には9つあり、以前、小林先生が語ってくださった哀歌もそうです。

ただし、詩篇25篇の特徴は、ヘブライ語のアルファベットのなかで、欠けているものと重複しているものがあるんですね。それは、秩序・完全さを求めながらも、混乱している、不完全な現状を表しているからではないかと言われることがあるのですが、そうだとすると、まさにそれはこの詩篇の内容と合致している。ぴったりなのです。

この詩篇25篇は1節に「**ダビデの詩**」とあることから、旧約聖書に登場するダビデが書いたとされてきました。ダビデは信仰的な英雄として描かれることが多いのですが、この詩篇では、彼の信仰は揺れています。迷子になっています。その理由は、この詩篇の内容を見るときに分かるのですが、この詩篇も他の詩篇と同様、彼が苦しみのなかにあったからです。

二. 物理的苦しみ：多くの敵と孤独な自分

少し飛ばして、16節からをご覧ください。

25：16 御顔を向けて、わたしを憐れんでください。わたしは貧しく、孤独です。

25：17 悩む心を解き放ち／痛みからわたしを引き出してください。

25：18 御覧ください、わたしの貧しさと労苦を。どうかわたしの罪を取り除いてください。

25：19 御覧ください、敵は増えて行くばかりです。わたしを憎み、不法を仕掛けます。

16節に「**わたしは貧しく、孤独です**」とあります。つまり、ダビデは孤独でした。そして、19節によれば、具体的に誰か、ということは分かりませんが、「**敵は増えて行**」っていた、ダビデには多くの敵がいて、彼らに「**憎**」まれていた。「**敵**」はたくさんいるのに、自分の味方はいない。そんな状況に置かれていたことがわかります。

三. 霊的苦しみ：罪の意識

しかも、そのような苦しみの背後には、もう一つ、彼を苦しめるものがあったことがわかります。6節からをお読みください。

25：6 主よ思い起こしてください／あなたのとこしえの憐れみと慈しみを。

25：7 わたしの若いときの罪と背きは思い起こさず／慈しみ深く、御恵みのために／主よ、わたしを御心に留めてください。

「わたしの若いときの罪と背きは思い起こさず」とあるということは、ダビデが過去の罪や失敗、後悔に苛（さいな）まれていたことが想像できます。確かに私たちには、年を重ねても、赦されていると頭では分かっているにもかかわらず消えない罪の記憶があります。さらに、11節にはこのようにあります。

25：11 主よ、あなたの御名のために／罪深いわたしをお赦してください。

先ほどお読みした18節にも「どうかわたしの罪を取り除いてください」とありましたが、これらは現在の罪のことでしょう。ダビデはこの詩篇25篇のなかで何度も自分の罪を告白します。

私たちも、何か具体的な問題が起こったとき、苦しみに遭うとき、それは自分の失敗、罪のゆえなのではないかと考えることがあると思います。もちろん、明らかに私たちの具体的な罪、失敗が原因であることもありますが、そうではないときも多いのに、私たちは自分の罪、失敗ゆえに神様が自分を罰しているのではないかと、神様に見捨てられたのではないかと考え、必要以上に自分を責めてしまうことがあります。

少なくとも、このときダビデは敵がいる、孤独であるという物理的な苦しみの背後で、罪の意識という霊的な苦しみに直面していたのです。

四、詩篇25篇の内容

ダビデは、敵がいる、孤独であるという物理的な苦しみと罪の意識という霊的苦しみという現実をしっかり直面していました。この世の中には、目の前にある現実を見ないふりをする人も多くなかで、彼は、現実を、状況を、否定しない。そのなかで歌われたのが、この詩篇25篇であったわけですが、その内容を先に申し上げます。それは、それでも礼拝すること、神に教えられることを願い求めること、そして、神様がどのような方であるかを確認することです。

その途中で、先ほど申し上げたように、ダビデは何度も自らの罪を告白します。それもまた祈りのなかでこそ気づかされる特権であり、祝福である。その意味で、信仰とは迷わないことではない。迷子にならないことではない。むしろ、迷うとき、迷子になるとき、迷っていることに気づかされたときにどうするかが問われるのだということを確認していきたいと思います。

五、それでも礼拝する①：礼拝し、信頼すること

では、一つひとつ見ていきたいと思います。ダビデが物理的・霊的苦しみのなかで、まず実行したのが、礼拝することです。礼拝し、神を信頼することです。彼は、このように祈り始めます。最初に戻って1節からをお読みします。

25：1 【ダビデの詩。】主よ、わたしの魂はあなたを仰ぎ望み

25：2 わたしの神よ、あなたに依り頼みます。どうか、わたしが恥を受けることのないように／敵が誇ることのないようにしてください。

これは以前も申し上げたことですが、ヘブライ語の「魂」というのは、人間の心も体も含む、全人格・全存在という意味です。

私のすべてによって、主なる神を「仰ぎ望み」とありますが、「仰ぎ望む」というのは「持ち上げる」「差し出す」とか「身を委ねる」という意味の言葉で、つまりは「礼拝する」という意味です。その上で、「わたしの神よ、あなたに依り頼みます」と宣言する、告白することからこの祈りは始まっていきます。

わざわざ、神様、私のすべてであなたを礼拝します、あなたに信頼しますと言っているということは、逆に言えば、神様を礼拝することが、信頼することが難しい心の状態だったのではないかと想像します。それ

でも、意志をもって、決断をもって、神を礼拝しようと、信頼しようとしている。

みなさんのなかにも、ひょっとしたら、今日は礼拝に集中できない。たくさんの敵がいるというわけではなかったとしても、何か嫌なことがあって、神様に対して不信感があるという方もいらっしゃるかもしれません。それでも、えいやっと礼拝にからだを持ってきた、それでもがんばって神様を信頼しようとしている方もいらっしゃるでしょう。

六、それでも礼拝する②：神に見捨てられて失敗してしまうのではないかと不安を差し出す

その上で、ダビデは祈ります。2節からをもう一度お読みします。

25：2 わたしの神よ、あなたに依り頼みます。どうか、わたしが恥を受けることのないように／敵が誇ることのないようにしてください。

25：3 あなたに望みをおく者はだれも／決して恥を受けることはありません。いたずらに人を欺く者が恥を受けるのです。

2節の「恥を受ける」という言葉は、ただ心理的に恥ずかしく思うというよりも、神との関係が破綻すること、そしてその結果として失敗することを意味します。

これも逆に言えば、神に見捨てられたかのような、失敗してしまいそうな状況だったのでしょうか。もちろん、理屈で考えれば、そんなわけではないと分かっている、不安に押し潰されそうになるとがある。ダビデはそれを隠しません。正直に、カッコ悪くても、率直に神にすがります。神様に対して祈り求めるのです。それでも、礼拝するのです。

七、人生で迷子になることがある

ここで最近、私が少し前に読んだ本をご紹介します。『ロスト・イン・ザ・ミドル』という本です。直訳すれば、中年期に迷子になるという意味で、いわゆる「中年の危機」についての本です。

いや、まだまだ若いでしょうと思われたかもしれませんが、中年というのは35～60歳という長い期間を指すそうで、私は今年40歳になりますので、立派な中年です。

そして、中年期は人生に迷いやすい、迷子になりやすと言われる。体が衰えてくる、死が近づく。仕事や家庭においても、人生の先がだいたい見えてくる。これまでの人生を振り返って、叶わなかった夢を思って、後悔に苛（さいな）まれる。

そんなときに、ダビデのように何らかの苦しい経験をすると、例えば、人間関係のトラブル、病や、離別、孤独などに突然見舞われたときに、プツンとキってしまうことがある。

礼拝に集中できない、神様に信頼するどころか、神様への恨みを覚える。神様に見捨てられたかのような感覚になる。過去の罪や失敗を振り返るとき、また今の自分の罪深さに愕然とする。

もちろん、このような感覚に陥るのは中年期だけではありません。クォーター理論というものもあるらしく、人生を100年として、四分割した25歳、50歳、75歳に「危機」を経験する、迷子になるとも言われます。

確かに、25歳ごろというのは進路選択や社会人なりたての時期です。私は仕事柄若い社会人のクリスチャンとの交わりがありますが、信仰がゆさぶられ、自分を見失いやすい時期です。そして75歳というのも、ちょうど健康寿命、つまり死ぬのはまだであっても、健康を失いやすい時期ですから、そこでも信仰がゆさぶられ、自分を見失い、迷子になることがある。

このときのダビデが何歳であったかはもちろん分かりませんが、物理的な苦しみのなかで、罪の意識、霊的な苦しみのなかで、神様への信仰が分からなくなっていた、神様に見捨てられたかのような感覚になっていた。人生の迷子になっていた。

でも、そのなかで、ダビデは諦めなかったのです。開き直らなかった。荒んだ心があったかもしれない。神様に失望したり、神様に怒りを覚えたりしたことがあったかとしれない。しかし、ダビデはあきらめなかった。それでも、神様にすがったのです。祈ったのです。

八. 神に教えられることを願い求める

ダビデが願ったこと。それが、4、5節です。

25:4 主よ、あなたの道をわたしに示し／あなたに従う道を教えてください。

25:5 あなたのまことにわたしを導いてください。教えてください／あなたはわたしを救ってください。神。絶えることなくあなたに望みをかけています。

詩篇23篇にも「正しい道」という言及があり、先月私たちが読んだ詩篇24篇には、「主の山に登る道」が描かれていましたが、詩篇25篇には、「**あなたの道**」「**あなたに従う道**」を教えてくださいという祈りが祈られています。

「道」、それは生き方です。「伝道」ということばがありますが、これは名訳だと言われ、ただ言葉だけ、口だけで伝えるのではなく、生き方を通して伝える、という意味がありますが、「**あなたの**」、つまり神の「道」、神に「**従う道**」、生き方を伝えるのです。

この詩篇25篇は中世のカトリックの修道院では、「人生の生き方を神の導きの下で整える祈り」とされてきたと言われます5節に「**あなたのまことにわたしを導いてください**」とありますが、イエス様が「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」と言われたことを響き合います。これは私の娘の名前の由来なのですが、続いて「**絶えることなくあなたに望みをかけています**」とあります。「**絶えることなく**」というのは「いつも」という意味です。苦しみのなかで、疑いのなかで、それでも神に導かれること、教えられることを待ち望むのです。

九. 神様がどのような方であることを確認する①：恵み深く、かつ正しくいらせられるゆえに、道を教えらるる主

そうやって祈るなかで、最初に申し上げたように、ダビデは自らの過去の罪に気づかれます。それが6、7節の祈りだったわけですが、祈りながら、罪人である自分に気づいていくというのは、ありますよね。逆に祈らないと、罪に鈍感になり、福音にも感動しなくなるわけで、その意味で、罪を告白すること、ことばにすることは大切です。そうすると、神様の恵みが、福音がさらに大きく迫ってくる。感動するのです。ダビデは、自らの罪を確認した上で、8節からの箇所では、神様がどのような方であることを確認します。

25:8 主は恵み深く正しくいまし／罪人に道を示してください。

25:9 裁きをして貧しい人を導き／主の道を貧しい人に教えてください。

「**主は恵み深く正しくいまし**」。つまり、神は愛と正義のお方である。もし「愛」だけであれば、ただ罪を赦すだけで終わるでしょう。もちろん、そうなのです。イエス・キリストの十字架のゆえに、罪は赦されるのです。私たちが自分で自分を赦せなくても、神は十字架にあって赦してくださいなのです。

しかし、同時に神は「**正し**」い方、「正義」のお方であるから、神は、「**罪人に道を示してください**」るのです。「**貧しい人**」を正しい道に「**導き**」、「**主の道を貧しい人に教えてください**」る。

だからこそ、教会は罪があるまま来ていい場所なのです。苦しむときにこそ、貧しさを覚えるときこそ、来て欲しいのです。なぜなら、神は、あなたに必要なことを、聖書を通して教えてくださいだからです。

十. 神様がどのような方であることを確認する②：約束を守られる神

その上で、ダビデは10、11節でまた罪を告白します。その上でまた、神様がいかなる方であることを歌います。12節からです。

25:12 主を畏れる人は誰か。主はその人に選ぶべき道を示されるであろう。

25:13 その人は恵みに満たされて宿り／子孫は地を継ぐであろう。

25:14 主を畏れる人に／主は契約の奥義を悟らせてくださる。

25：15 わたしはいつも主に目を注いでいます。わたしの足を網から引き出してくださる方に。

罪に気づき、罪を悔い改め、「**主を畏れる人**」には、神様は、「**その人に選ぶべき道を示**」してください。13節の「**恵み**」は、神様が創世記でこの世界を造られたときに「非常に良かった」と言われたときのことばです。神様との正しい関係にあることであり、だからこそ、その人は「**地を継ぐ**」、つまり神の国、新天新地に入ることができるのです。

14節の「**主を畏れる人に／主は契約の奥義を悟らせてくださる**」ということは、神様が約束を守られることを教えてくださる。思い起こさせてくださるということです。

15節の「**網**」は、敵の罠です。特に目に見えない危険、陰謀、特に自力では抜けられないものの比喻です。ダビデは今まさにそれに苦しんでいましたが、神様は、必ず、助けてくださるのです。

十一．最後の願い

16～19節では、最初に申し上げたように、ダビデの具体的な苦しみ、そして罪が告白された上で、神への訴え、願いでこの祈りは閉じられます。

25：20 御もとに身を寄せます。わたしの魂を守り、わたしを助け出し／恥を受けることのないようにしてください。

20節は、2節の繰り返しです。その意味では、この祈りを祈ることで、状況が解決したわけでは全くありません。まだ状況は変わってなくても、解決していない。だからこそ、21節に注目したい。

25：21 あなたに望みをおき、無垢でまっすぐなら／そのことがわたしを守ってくれるでしょう。

「**無垢でまっすぐ**」とあります。「**無垢**」ということばは「誠実」という意味もあることばですが、これは罪がないという意味ではなく、神様との正しい関係にあるという意味です。「**まっすぐ**」とは、「潔白」という意味もありますが、罪がないというよりは、神様を求めるあり方を意味します。いずれも、神様が与えてくださるものですが、それが、自分を守るように、と祈ります。

最後に22節をお読みします。

25：22 神よ、イスラエルを／すべての苦難から贖ってください。

この祈りは、ダビデ個人の祈りであるとともに、イスラエルという共同体のための祈りでもあります。歴史的にはこの詩篇はバビロン捕囚のなかで歌われたと言われます。

もう一つ、カトリックの伝統ではこの詩篇は巡礼者の祈り、旅の途中で祈りとして祈られてきたと言われます。私たちの人生も旅であると言われます。旅の終着点、つまりイエス・キリストの再臨において実現します。それまでは、物理的な苦しみと罪の意識という霊的苦しみに直面することがある。

先ほど、必ず私たちは「**網**」から助け出されるのだと申しました。しかし、この地上においては、物理的には助け出されないことがあります。病を、死を経験することはあります。仕事がなくなることも、家がなくなることもあるかもしれません。拒絶され、圧力をかけられ、虐待されるかもしれない。銀行口座の残高もゼロになるかもしれない。友人や家族も失うこともある。けれども人生で最も不可欠ですばらしいものは奪われないのです。イエス様が来られるとき、神の国が完成し、新天新地に入るときには、最終的に救われる、助け出されるのです。

この後、私たちが賛美するのは「主と主のことばに」という賛美です。私たちは人生の迷子になることがある。でも、そんなときに、迷子になっていることに気づかされたとき、それでも礼拝するのです。と、主がくださったみことばに頼るのです。聖書を通して、神様に教えられ続けることを願い求めるのです。神様がどのような方であるかを確認しつつ、赦されながら、きよめられながら、永遠の御国まで続いていくのちの道を歩む生き方に、楽しさに満ちた歩みへと、主はこの朝あなたを招かれています。この招きにあなた

はどう応えるでしょうか。お祈りしましょう。

応答の賛美：主と主のことばに（新聖歌324）

1. 主と主のことばに 頼るはたのし 主はわが願いを 聞きいれたもう
※ひたすらただ主に 頼るわが身を 主よ主よなおなお 恵ませたまえ
2. きよくなしたもう 血しおとうとし いま信じくぐらば きよめらるべし
3. 地につく宝を 捨つるはやすし いのちの小道を たどる身なれば
4. ただ主にたよりにて 暮らすはたのし かなたの国まで みちびきたまわん